

だるまは日本では縁起物として有名です。真っ赤に塗られた丸いボディに黒筆で描かれた立派なひげと眉が威厳を感じさせます。目は白いままのものもあり、選挙の際、当選した議員がだるまに目を入れる場面を思い出します。この時期は各地で開催される「だるま市」も気になるところ。だるまについて調べてみました。

節句人形

素朴なギモン



祈願だるまは全国各地の寺社仏閣で見ることができる

## 禅宗の祖・達磨大師がモデル

厄除祈念や必勝祈願の縁起物として広く親しまれている「だるま」。ほとんどが赤い張子で製造されていて、起き上がるようになっている置物である。モデルとなったのは達磨大師という人物だ。

達磨大師は南インドにある香至国こうしこくの第三王子として生まれ、幼名は菩提多羅ぼだいたらといった。菩提達磨の僧名を得て、インドで布教に邁進し、後に中国において禅宗の基礎を築いた。その教えは鎌倉時

代に日本に伝わり「禅」と呼ばれ広まった。だるまは達磨大師が座禅している姿を模している。

だるまの色が赤いのは次の理由が考えられる。

中国には古くから、赤色が病や災難を防ぐという信仰があった。例えば、家の玄関に赤い貼り紙をして災難を防ぐというもの。この信仰は災難除け、とりわけ疱瘡除けのまじないとして室町時代、日本に広まった。

## 中国から伝わった複数の要素を組み合わせてできた、だるま

起き上がる形状になったのなぜか？考えられている要素は次の通りだ。中国の唐時代に作られた「酒胡子しゅうこし」という木製の玩具があった（独楽に似ているもの）。宴席でこれを回し、倒れた側の人間が酒を飲み干したり、芸を披露したりした。平安時代中期に作られた辞書『和名類聚抄わみょうるいじゆしやう』にも記載がある。当初は木製だった酒胡子は、やがて木型と紙を使って張子で作られるようになった。木を一つずつ刻んで作るよりも、張子の方が簡単にしかも安価で大量につくれるためだ。木製から張子になったことで、倒れる玩具から起き上がる玩具に変わった。これが「不倒翁ふたうおう」という名前が縁日などで売られるようになり、子孫繁栄や災

難除けなどの縁起物として根付いていき、やがて室町時代の日本にも、この不倒翁はやってきたのである。日本で、張子に赤い法衣をまとった達磨大師を描いたおもちゃが完成したのは江戸時代後期のこと。倒れても起き上がりだるまは大ヒット商品となった。その後、群馬で副業としてだるま作りが盛んになると豊蚕の縁起物となり養蚕地に広まった。豊蚕祈願、赤色の疱瘡除け、七転八起の縁起物として寺社仏閣の縁日で売られるようになり、「だるま市」が定着。高崎だるま市、毘沙門天だるま市、深大寺だるま市は、日本三大だるま市として有名。

※不倒翁……倒してもすぐ起き上るよう、底におもしをつけた人形。おきあがりこぼし。

監修 林直輝さん（日本人形文化研究所所長）

参考文献 日本人形玩具学会編『日本人形玩具大辞典』（2019年、東京堂出版）など